



第一回/品川

中川寛子の街探訪

Shinagawa

原美術館 ※掲載の写真は平成25年4月に撮影したものです。

江戸、明治、昭和、平成まで 全ての時代の人気住宅地が 揃う品川駅周辺

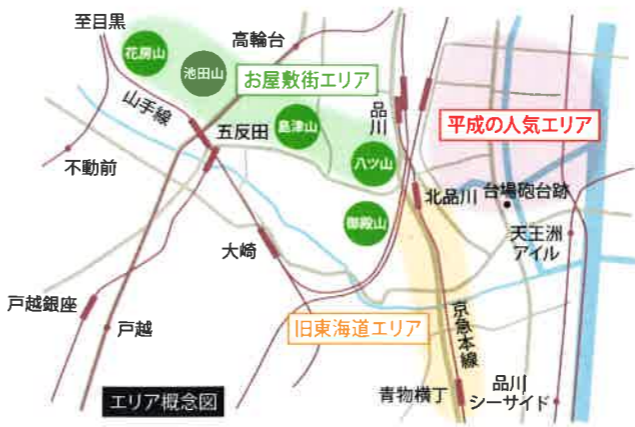
品川駅周辺は住宅好きにはおもしろいエリアである。品川区内には江戸時代から始まり、明治、昭和、平成までのお屋敷街、人気の住宅地が全部揃っているのだが、それらが集中しているのが品川駅から目黒駅にかけてなのである。

まず、品川駅に近く、江戸時代から有名な場所といえば、御殿山現在の品川区北品川3〜6丁目付近がある。この地名は徳川将軍家が鷹狩の折りに休んだ品川御殿があったことに由来し、さらに遡ると室町時代には太田道灌の館があった場所。往時は海の見える桜の名所として知られており、浮世絵にもしばしば登場している。

その後、台場建設のために削られ、山手線建設時に真っ二つにされてしまったものの、明治から昭和にかけての実業家、原邦造の邸宅が原美術館となって現存していることから分かるように、以降もずっとお屋敷街。現在も広壮という言葉にふさわしい邸宅が点在する。

その御殿山と第一京浜を挟んで聳える八ツ山には岩崎弥之助がイギリス人建築家、ジョサイア・コンドルに設計を依頼した豪華華麗な洋館、開東閣があり、さらにこの辺りから目黒駅にかけては島津山、池田山、花房山など、かつて山と呼ばれた高台がある。いわゆる城南五山だが、これも地名としては残っておらず、わずかに交差点、小学校、通りの名前などに名残りが残っている。

江戸時代は身分と住む場所の高低が見



事にリンクしていた時代で、高台には大名屋敷があり、下がるに従って住む人の身分が下がり、低地は町人地。その後も明治から昭和までは、土地、住宅価格と土地の高低はほぼ一致しており、城南五山はそのお手本のような場所なのである。中でも、そのリンクを露骨なほどに感じさせてくれるのが池田山である。現在の地名表示では品川区東五反田4〜5丁目付近。この地の名称は備前岡山藩池田家の下屋敷に因っており、皇后美智子さまのご生家があったことでも有名だ。

ここに池田家の下屋敷の奥庭部分が区立池田山公園として残されているのだが、公園入口に立つと、目の前に広がる高低差に驚かされる。

大正末期から昭和にかけての住宅地の宣伝には必ず、高台立地が謳われたが、高台であることは当時の住宅地に必須の条件だったわけである。

東海道沿いの漁村が 埋立て、タワー建設を経て 平成の人気エリアに変貌

ところで、城南五山が立地するのは品川駅の西側である。では、東側はどんなところだったか。文明開化期、明治9年から19年くらいは地図を見ると、駅は乗車場と書かれており、砂洲らしき影は見えるものの、線路の向こうは海。江戸時代の東海道は海辺の道だったそうだから、当然だろう。

その面影を微かに残すのが品川区東品川1丁目にある台場小学校の形状である。今の私たちは台場というテレビ局のある地を思い浮かべてしまうが、台場とはそもそも、徳川幕府が黒船襲来に抗するために作った砲台。大半は海上に築造されたが、ひとつだけ、御殿山のふもと、海岸沿いに作られたものがあつた。

今もその先端部分が小学校の敷地の外周となつて残っているのである。現在はそれより海側に天王洲があり、さらに品川埠頭があるが、かつては台場小学校から向こうは海だったわけである。

当時の海の雰囲気イメージしたかったら、第一京浜沿いに大きな鳥居のある品川神社に行ってみると良い。最寄り駅は京浜急行線の新馬場。道路沿いに江戸時代に作られた富士塚があり、そこを登って海沿いを見ると、目の前に京浜急行の高架があり、そのちよつと先までが海だったはず。想像しながら見下ろすと、この地に昔ながらの江戸前天ぶらの店がある理由が分かる。品川浦は幕府に魚介を献上していた御菜八ヶ浦のひとつで、様々な種類の魚が上がる地だったのだ。



品川インターシティ・品川グランド commons

品川界隈が時代とともに埋立てられ、東側の港南口が現在の姿となったのはほんの20年ほど前、旧国鉄の貨物ヤードの再開発計画が都市計画決定されて以降。ちよつと首都圏にタワーマンションが増した時期とも重なり、土地自体は低いものの、進化した技術を駆使した高層建築物が従来の高台にあるお屋敷に変わり、新しい人気エリアとなつて行く。その意味で港南口のタワーは平成のお屋敷街とも言うべき存在なのかもしれない。

かつて「港南戦争」と呼ばれたタワー建設ラッシュは一段落したが、このころへ来て浮上してきたのが、山手線最後の新駅建設計画。計画自体はすいぶん昔から出ては消えを繰り返していたが、今度は本当らしい。完成は平成32年、もし、オリンピック招致が成功したら、ちよつとこの年である。実現したらすごいことになりそうだ。

見て、触れて、知って

東海道五十三次最初の宿場町「品川」



北品川商店街

旧東海道沿い、 京浜急行沿線の街には 歴史と変化の波が

もうひとつ、品川周辺では旧東海道の街も忘れてはならない。品川で始まったマンション建設ラッシュは緩やかに京浜急行沿線へも波及しているようだし、寂れるばかりの歴史ある街を何とかしなくてはと地元も立ち上がっている。

京浜急行線北品川駅周辺から第一京浜と交わる鈴ヶ森あたりまでは、旧東海道がかつての道幅で残されており、そのうち鮫洲と青物横丁の境あたりまでが品川宿。海が近く、おいしいモノが食べられ、桜や紅葉の名所に寺社があり、また、きれいだところもいるとあつて江戸時代の品川は一大レジャーランドだったとか。その様子は落語の「品川心中」や「居残り佐平

次」などに詳しい。現在の旧東海道沿いは商店街となっており、ところどころに往時を偲ばせる寺社や趣きある商家が残されている。通り沿いの案内所、品川宿交流館に散歩マップが用意されていることもあり、ここ数年でカメラ片手に歩く人も目に付くようになった。

特にカメラ好きに愛されている撮影スポットが北品川橋である。大正14年に掛けられた橋からは、昭和の木造民家、団地の上に平成の高層ビル群が望め、街の変化が実感できる。江戸時代から変わらぬものは足元を流れる水くらいだろう。

ちなみに品川は江戸前の漁場であつたし、昭和37年までは海苔の産地。今も街中には海苔屋さんが残っている。訪れたら土産にぜひ。昭和30年代に映画館で音を立てずに食べられると大ヒットした品川巻もこの地の産。こちらもお勧めだ。

All About「住みやすい街選び(首都圏)」を担当する住まいのエキスパート

中川 寛子

日本地理学会会員
日本地形学連合会員

20年以上住まいの雑誌編集に携わる経験を生かし、実際に歩いて集めた街情報を紹介します。著書:住まいのプロが教える家を買いたい人の本(翔泳社)他多数